

主体的・
対話的で
深い学び

授業実践

英語

他教科の学習内容を英語で学ぶ授業で、
生徒の思考を深め、複眼的な視野を養う

埼玉県・私立西武学園文理中学・高校 土屋進一

8:55 単語当てゲーム



ペアの1人がある言葉を英語で説明し、もう1人がその言葉を当てる「Word Definition Game」を行った。本時に扱った言葉は、授業内容にかかわる「宮中」と「帝」で、正解したペアから着席。全員着席した後、土屋先生が各語の英語での説明を読み上げ、生徒はそれを復唱した。

本時の概要

【対象／教科／科目】2年生／英語／コミュニケーション英語Ⅱ
 【分野・単元】『源氏物語』『桐壺』の原文と英訳の比較（全1時間。P.43に本時の指導計画を掲載）
 【育成を目指す資質・能力】思考力、表現力、協働性
 【学習内容】国語科との教科横断型授業で、既習の『源氏物語』『桐壺』の冒頭部分を英訳することが課題。ウォーミングアップの後、「桐壺」の原文と既存の2種類の英訳とを比較し、気づいたことを班ごとに共有。古文を英訳する方法や留意点などを学んでから、各自で英訳を作成した。

主 主体的な学び
 対 対話的な学び
 深 深い学び

9:25 気づきを発表して共有



各班が「英訳Aの方が原文に近い」「英語には敬語の概念がない」などの気づきを発表。土屋先生が、「『時めく』は“loved”より“was favoured”の方が適切ですか」と投げかけると、中澤先生は、「『時めく』には受け身の意味があるので、後者が適切です」と解説した。

つちや・しんいち 教職歴18年。同校に赴任して19年目。英語科教長。学習塾勤務後、大学院で英語教育や第二言語習得などの理論を学び、現任校に赴任。現在、授業動画の配信、執筆、講演等を通じて自身の経験やスキルを公開し、英語教育の向上に努めている。

学校概要

◎自然豊かな埼玉県狭山市の郊外にある私立の中高一貫校。教育方針は、「すべてに誠をつくし最後までやり抜く強い意志を養う」。進学教育・人間教育・グローバル教育を3本柱として、学ぶ意義を考える課題解決型学習、海外研修や留学生の受け入れなどを通じた国際理解教育等、意欲的な教育を展開している。

◎設立 1981（昭和56）年

◎形態 全日制／普通科・理数科／共学 ◎生徒数 1学年約300人

◎2021年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、京都大、神戸大、横浜国立大などに35人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、東京理科大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ720人が合格。

※プロフィールは、2022年3月時点のものです。



9:12 原文と既存の英訳を比較



土屋先生が、本時の課題は「桐壺」の冒頭部分の英訳であることを説明。生徒は3～4人ずつの班となり、原文と既存の2種類の英訳とを比較して、気づいたことを話し合った。机間指導で、中澤先生は「『思ひあがる』はプライドを高く持つことで、悪い意味ではないよ」などと、古語の意味を解説した。

9:06 古語の説明文選択クイズ



土屋先生と国語科の中澤美智子先生が、「やんごとなし」「時めく」の古語を例に、『源氏物語』の英訳の難しさを英語で語り合った。次に、古文の授業の復習として、『源氏物語』に登場する古語の英語での説明文を3つの選択肢から選ぶクイズを行い、「御時」「さぶらふ」など、7問を出題した。

本時のキー課題

9:40 生徒の英訳を講評



生徒の英訳をホワイトボードに映し、「“certain” を使って時代をぼかし、寵愛を“jealous” で表すなど、単語選びが的確ですね」などと、土屋先生が講評。中澤先生は、「本作品の素晴らしさを考えるきっかけにしてほしい」とエールを送った。最後に、各自が自己評価シートに記入した。

9:30 オリジナルの英訳を作成



ホームステイ先でホストファミリーに『源氏物語』の冒頭部分を説明するという場面設定で、「桐壺」の英訳を各自で作成。読み取った内容を自分の言葉で説明するリテリングも可とした。作成を終えた生徒は、スマートフォンで自分の英訳を撮影し、その画像をクラス共有のフォルダに送信した。

● 私が目指す授業

「コンテンツ重視の授業で
「深い学び」を目指す

本校に赴任して約10年間は、分かりやすい授業こそがよい授業だと考え、様々な外部研修に参加し、そこで学んだ手法を試しては生徒の反応を見るといった試行錯誤の連続でした。ある時、授業の冒頭で「World Definition Game」を行ったところ、生徒の目が格段に輝き、「これだ!」と思いました。それをきっかけに、生徒同士が英語でやり取りをする中で、自身の成長を実感できる活動中心の授業こそが、生徒の心をつかみ、私自身も楽しく授業ができることに気づきました。今で言う、「主体的・対話的な学び」を通じて英語4技能を統合的に伸ばしていく、現在の授業スタイルに行き着きました。

また、生徒が「深い学び」に到達するよう、コンテンツ重視の課題に取り組ませています。他教科の学習内容や異文化理解などを、英語で学びながら、英語4技能を統合すると同時に思考力も養う授業です。それが、CILEL(*)と同じ考え方であると、後に知りました。

* Content and Language Integrated Learning の略で、日本語では「内容言語統合型学習」と訳される。教科やテーマの内容と外国語を組み合わせた学習で、外国語の習得とコンテンツの理解を等しく重視し、思考力やコミュニケーション能力の育成を図る学習方法。

現代社会は先行きが不透明だと言われていますが、そうした時代を生き抜くためには、様々な事象を結びつけながら考え、複眼的な視点で課題に取り組む力が求められます。そこで、文理融合や教科間のつながりを生徒が意識できる授業が必要だと考えました。

●私の発問・課題設定の観点
英語と他教科の双方の学びの効果を想定し、教師2人で細部を検討

4年前、進化論をテーマにした大入学入試問題を授業で扱った際、理科の教師に解説をお願いしたところ、内容をよく理解できた生徒に好評でした。クリームの観点からも、教科横断型授業は英語学習に効果的だと考え、以降、学期に1回のペースで実施しています。これまで、国語科、地理歴史・公民科、数学科、理科、家庭科と授業を行いました。

例えば、物理と連携した授業では、“speed”と“velocity”の違いをテーマにしました。私が2つの英単語の定義を英語で伝えた後、理科の教師が「速さ」と「速度」の違いを数式を用いて解説しました。“speed”は速度の大きさを表し、“velocity”

図1 生徒の英訳(例)

【原文】
いろいろの時節にか、女御、更衣あまた續ひける中に、いとやむごとなき朝にはあらぬが、すけて時の急ありけり。はじめより我はと想ひ上がり給へる御方か、めざましきものに、おとしめそねみ願ふ、同じほど、それより下賜の更衣たちは、まじて安からず。

昔、高貴な女性が沢山の宮中に、勤しむ高貴な人が帝に愛された人だった。自分^がはと想っていた宮中の女性たちは彼女を妬んだ。特に、その人より上の地位の女性たちは、帝と結婚できる可能性がなくなった！とよりresentful^{resentment}に思った。

Once upon a time, there was a woman who was not so noble but much loved by the emperor. Other women in the royal court envied her. Especially, the women of higher rank than the woman were resentful because they lost their chance of marry with her, the emperor.

Well done! This was my own words. (え)

【私が私のポイント・こだわり】
この説明は、より学術的な研究発表の場合ではないので、厳密に文章を訳すよりも、リズミカルに分かりやすく解説をするように心がけた。古典の授業で習った通り理解した、そして学んだ、の部分も、補って訳した。

【人の先生に聞いてみたいこと・疑問点】
ホームステイ先で、ライオン館では、精密な翻訳より目立たないように手早く面白い所を、アップして読ませようという方針が、私も面白がるように、このように訳を出したので、ぜひこの補った部分は英語の先生、古典の先生と聞いてみたいと思うので、ぜひお願いします。

*学校資料をそのまま掲載。

図2 自己評価シート(例)

評価項目	自己評価
1. パワーワークやグループワークで他の生徒と協力しながら学習ができた。	5・(4)・3・2・1
2. 古典と英語を比較し、言語的な共通点や相違点を探ることができた。	5・(4)・3・2・1
3. これまで学んだ知識を活かしてオリジナルの英訳を作成することができた。	5・(4)・3・2・1
4. 今日の授業の中で「学んだこと」「気づいたこと」「残ったこと」を教えてください。 英語で古文を読み、ただ内容を理解するだけでなく、単語1つ1つの意味を考えずにはいけなくて、英語の語彙だけでなく、古文の理解を深めることになると思った。古文も英語も慣れない言語であるが組み合わせるととても深い内容になる。とても面白かった。最後に先生がおっしゃっていた“Once upon a time”の話は、はじめて聞いた話だったので、とても勉強になった。	

*学校資料をそのまま掲載。

は一定のベクトルを持った速度を示すものだとして理解することで、生徒は2つの英単語の本質的な違いもつかめたと思います。

教科横断型授業では、事前準備が重要で、私の場合、一緒に授業を行う教科の担当と話し合っただけで決めた後、私が作成した授業案をたたき台にして意見を出し合いながら細部を詰めていきます。その過程に5時間ほどかかります。

本時の準備では、生徒に既存の英訳を提示するかわりに論点になりました。中澤先生と検討した結果、英語には尊敬語・謙譲語といった敬

語の区別がない点や、翻訳にあたっては冗長な部分はあえて省略される点など、原文と英訳との比較によって、言語や文化、思考法に違いがあることに気づいてほしいと考え、英訳を提示することにしました。原文に忠実な英訳と、意識的な英訳の2種類を用意したことで、生徒の多様な気づきにつながりました。

古語の英訳(図1)では、文脈を踏まえて原文を理解し、それに適切な英単語や語句をあてはめる必要があります。その過程で、丁寧に辞書を引くことの大切さや、微妙なニュアンスの違いを考慮する必要性を、

感できたのではないかと思います。

授業では、一緒に授業を行う教師と私とのやり取りを大切にしています。生徒の反応や生徒から出される質問を想定し、それらへの対応案をできる限り用意して台本を作り、2人で授業のリハーサルも行います。また、一緒に授業を行う教師が英語を使う場面を必ず設けています。ミニドラマシをテーマにした授業では、ミニドラマシが人の栄養状態の改善に寄与することを家庭科の教師に、また、理科の教師には動物と植物の特徴を併せ持つミニドラマシの性質を、それぞれ英語で解説してもらいま

グローバル人材にふさわしい教養を

国語科・中澤美智子先生

今回初めて、英語科との教科横断型授業を行い、私自身にもたくさんの気づきが生まれました。古語を英語に翻訳する作業は、生徒だけではなく、私の言語への関心を高めてくれることとなったのです。



例えば、今回扱った英訳の1つは、「父の大納言は亡くなりて」の箇所を訳すのに「dead」という語を用いました。あまりに直接的過ぎる表現に違和感を覚え、土屋先生にお話ししたところ、「私なら『passed away』と訳しますね」とのこと。そこで、もう1つの英訳を確認すると、そちらは「was no longer living」と、婉曲的な表現となっていました。今回の授業を通じて、言葉を正確に用いるよう心がけることはもちろん、より適切な言葉を選択することの大切さ、さらには、より美しい表現を追究することの面白さを改めて感じることとなりました。

約1000年も前に、『源氏物語』のような文学作品が与えられたことを、私たち日本人はもっと誇ってもよいと思います。生徒たちには、日本人としてのアイデンティティを確立し、将来、自信を持って「日本」を世界に発信できるような人材になってほしいと思っています。今回の授業が、そのきっかけになることを願っています。

た。他教科の教師が英語で話すことに挑戦する姿は、生徒にとっても大きな刺激になると考えています。

●成果と展望

他教科との関連を整理し、計画的に教科横断型授業を実施

教科横断型授業の魅力は、異なる教科による連携が生む「化学反応」にあります。それまで教科ごとに学んでいた事柄のつながりに気づいた時、生徒の目は輝きます。それこそ

生徒が「深い学び」に達した瞬間であり、私にとつてのやりがいになっています。自己評価シートに、「英語と他教科のつながりが分かり、両教科への興味・関心が高まった」といった感想が書かれることも少なくありません(図2)。

今後の課題は、教科横断型授業を年間指導計画に組み込むことです。学期に1回は行っていますが、現状は、単発的な内容にとどまっています。例えば、英語の授業でアパルトヘイトの単元を学習していた時、世界

VIEWnext ONLINE では、
本時の授業の様子を
ダイジェスト動画で紹介!

VIEWnext ONLINE 検索

さらに、校内の連携にとどまらず、他校とのオンライン授業も検討中です。日本全国の先生方とノウハウを共有し、海外にも交流の輪を広げていくことで、日本の英語教育の底上げに貢献できればと考えています。

史では近代の植民地政策を学んでいると知り、世界史の教師に具体的な学習内容を聞きました。すると、学習内容に合致する点があることが分かり、教科横断型授業を実施したところ、歴史的な背景を踏まえた深い学びが英語の授業で実現しました。

教科横断型授業を意図的に行うためには、生徒がどの時期に何を学ぶのかを把握することが必要です。カリキュラム・マネジメントの視点から、英語と他教科の学習内容のつながりを整理し、年間指導計画を組み立てたいと考えています。

単元の指導計画

【教科・科目】英語・コミュニケーション英語Ⅱ 【分野・単元】『源氏物語』『桐壺』の原文と英訳の比較 【テーマ・作品】『源氏物語』『桐壺』 【設定時数】1時間 【単元目標】①古文と英語の両方の視点から作品の理解を深める。②翻訳時の背景知識の大切さに気づく。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	『源氏物語』『桐壺』のオリジナル英訳の作成	これまで学習した知識を用いて意欲的に探究している 【思考力、表現力、協働性】	①ペアで古文の知識を英語で確認する。 ②3～4人ずつの班をつくり、『源氏物語』『桐壺』の原文と英訳を比較して、気づいたことを話し合う。 ③話し合ったことを踏まえ、オリジナルの英訳を作成する。 ④生徒のオリジナル英訳を全体で共有し、英語科・国語科の教師と生徒でディスカッションをする。 ⑤自己評価シートに振り返りを記入する。	【主体的な学び】これまで学習した古文の知識を用いて英語で表現できるように指示をする。 【対話的な学び】班で協力して活動できているか、確認する。 【深い学び】英訳が完成したら、生徒に説明させ、助言、指導を行う。	自己評価シート

※土屋先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。